

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
48(2): 126

第10回ヨーロッパ国際魚類学会に参加して On the 10th International European Congress of Ichthyology, Prague, Czech Republic, September 3-7, 2001

本年9月3日から7日にかけて、チェコ共和国の首都プラハで開催された第10回ヨーロッパ国際魚類学会(ECIX)に参加した。この魚類学会は3年に1回、ヨーロッパ各国を主催国として開催されるのが通例となっている。しかし、前回(1997年)のイタリア(トリエステ)での開催以降、会議開催を引き受けるホスト国がなかなか決まらなかったため、今回は4年目の開催となった次第である。

今回の大会会長を務めたのは、プラハにあるチェコ国立農科大学のPetr Lab教授で、日本魚類学会の国外会員でもある。彼に聞いた話では、大会への参加者は約40カ国、284人で、前回(60カ国、約350人)より少し減ったが、つい10年ほど前までは社会主義国であった国での初めての開催としては、盛会であったと評価できるだろうとの言であった。日本からの参加者は、高木和徳、藪本美孝の2氏と私の3名と、今年、南アフリカで開催されたIPCと較べるとたいへん少ない参加であったと言える。

大会は、3日午前中での大会会長のLabさんとECI会長のM. Cottelatさんの挨拶、M. PenazさんによるOutline of recent ichthyology in the Czech Republicのオープニングアドレスに続き、CottelatさんのThe fishes of LaosのタイトルによるPlenary Lectureで幕を開けた。そして、午後からは一般講演が始まり、7日の午前中まで続けられた。設けられたセッションは、1) Anatomy, Histology & Morphology, 2) Biogeography & Distribution, 3) Conservation & Introduction, 4) Cytogenetics, 5) Databases Issues, 6) Ecotoxicology, 7) Fish Community & Population/Species Dynamics, 8) Fish Physiology, 9) Molecular Ecology, Phylogeny, Phylogeography & Systematics, 10) Ontogeny, Larvae & Reproduction, 11) Paleontology, 12) Parasitology, 13) Systematics, Taxonomy & Phylogeny, 14) Trophic Relationships & Feeding, Foodの14セッションであり、それらが3会場に分かれて口頭発表されるとともに、別の1会場でポスター発表が繰り広げられた。

全発表演題数は約150題で、その8割以上が淡水魚類を扱ったもの。中でも、*Cobitis*属(7題)と*Cottus*属(10題)に関する発表が目についた。私は、セッション9で

「極東アジアの淡水カジカ類の系統と分散」というタイトルで発表を行ったが、その後に7題の講演が続いたため、それらは*Cottus*のミニセッションとして位置づけられたほどである。カジカ属魚類に関するヨーロッパの研究者の発表は、すべて*C. gobio*の分子系統に関するものばかりで、降河回遊性のアユカケや両側回遊性のカンキョウカジカ、エゾハナカジカなどを含めた極東アジアのカジカ属についての発表は異色であったらしい。その発表の翌日に関係発表者が集まってカジカ・ミーティングを開き、サンプルの交換や今後の研究課題についての意見交換が行うことができた。まさに、わざわざプラハまでやって来た甲斐があったわけである。

一方、9月4日の午後には開催されたAgenda of General Assembly of EIS-informal discussion about EIS issuesでは、ヨーロッパの淡水魚類の40%以上の種が絶滅危惧にあるのに、それらの多様性と保全に関する研究発表がたいへん少なかったことがCottelatさんから指摘された。そして、前回のイタリア大会でFish Biodiversityがメインテーマとされたような取り組み(企画)が今後必要であると強調されたのが印象に残った。また、6日午後には開催されたGeneral Assembly of EISの場では、この学会活動のアクティビティーを高めるための方策として、学術雑誌の刊行が必要であるとする意見や、日常活動に必要な資金を確保するのにメンバーシップ制を確立すること、また大学院の学生たちがもっと大会に参加しやすくするための補助制度の確立を求める意見などが数多く出された。しかし、これらの課題のほとんどは今後の検討課題として積み残され、実施が決定されたのは、電子メールを使ってニュースレターを定期的を送付することくらいであった。地理的に離れたヨーロッパ各国では、経済状態も異なり、同一の意識レベルで学会を運営・維持していくことがいかに困難なことであるかを見せつけられた集まりであった。

次回の第11回大会は2004年に開催されるはずであるが、そのホスト国は今年の12月中に決定するとしてペンディングにされた。3年後の大会にはもっと多くの日本の魚類研究者が参加することを願って、今後、ヨーロッパ魚類学会の情報を提供していく予定である。

(後藤 晃 Akira Goto: 〒041-8611 函館市港町3-1-1 北海道大学大学院水産科学研究科 e-mail) akir@fish.hokudai.ac.jp)